

# 埋蔵文化財 愛知

No.1

## 「埋蔵文化財愛知」創刊にあたって

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター  
理事長 奥田 信之



本年4月1日に設立されました財団法人愛知県埋蔵文化財センターの広報紙として、本紙を創刊するにあたり一言ごあいさつ申し上げます。

愛知県には、先人の残した遺跡が数多くありますが、これらの遺跡は県民共有の文化遺産として、これを保護し、活用をはかって後世に引き継いでいく必要があるものであります。

しかし、近年日本経済は低成長期に入っているにもかかわらず、開発事業に伴う埋蔵文化財に関する発掘調査の件数は、全国的にも増加の一途をたどっており、この傾向は本県においても同様でありまして、昭和50年度に20件であった発掘届出件数は、昭和55年度に60件、昭和58年度には、148件と急増している状況であります。本県では、こうした事態に対応して、昭和56年度に財団法人愛知県教育サービスセンターに埋蔵文化財調査部を設け、主として名古屋環状2号線建設に伴う事前の発掘調査を実施してまいりましたが、なお増加する一方の発掘調査に対応していくためには多くの困難があり、また限界が生じました。

このような状況のもとにあって、財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、県下の埋蔵文化財の発掘調査及び研究のより適正を期するとともに、出土遺物等の適切な保存活用、さらには一般県民に対する保護思想の普及啓蒙を図るなど、埋蔵文化財保護について総合的機能を果していくことを目的として設立されました。

そして、本埋蔵文化財センターは、財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部のすべての業務を承継し、当面は名古屋環状2号線に所在する遺跡 — 朝日遺跡・朝日西遺跡・清洲城下町遺跡・松の木遺跡・土田遺跡（以上、愛知県西春日井郡清洲町地内）、及び阿弥陀寺遺跡・大淵遺跡（海部郡菟目寺町地内）の7遺跡 — の調査が主体となりますが、普及、啓蒙などの事業も可能な限り実施していくことといたしております。

ここに創刊いたしました「埋蔵文化財愛知」は、本センターの事業を広く紹介し、調査した成果を発表して埋蔵文化財に関する諸事項について正しい御理解をいただいて、その保護に対する御協力を願うための広報紙として年4回発行するものであります。

今後とも、職員が一致協力して、埋蔵文化財の発掘調査事業の推進と発展のために、微力ではございますが、努力を傾注してまいりたいと存じますので、一層の御指導・御援助を賜りますようお願い申し上げます。「埋蔵文化財愛知」創刊の辞といたします。

昭和60年9月

昭和60年度 事業計画

- 名古屋環状2号線の建設に伴う事前調査など、約50,100平方メートルの発掘調査と報告書の作成を行います。  
 名古屋環状2号線関係 約47,400㎡  
 国鉄瀬戸線関係 約 400㎡  
 勝川土地区画整理事業関係 約 1,700㎡  
 御津地区県立学校建設関係 約 600㎡  
 発掘調査概要報告書(年報)の作成
- 県内市町村の埋蔵文化財担当職員を対象とした研修会を開催します。

- 基礎研修会 3日間 募集人員 60名  
 専門研修会 2日間 募集人員 50名
- 県内の埋蔵文化財発掘調査状況や埋蔵文化財センターの動向をお知らせするための広報紙誌を発行します。  
 「愛知県埋蔵文化財情報」の発行 年1回  
 「埋蔵文化財愛知」の発行 年4回
- 以上の事業を行うため9億9,257万5千円の予算を計上しております。

名簿一覧

役員

- 理事長**  
 奥田 信之 (県教育長)
- 常務理事**  
 中林 茂 (兼事務局長)
- 理事**  
 井関弘太郎 (名古屋大学教授)  
 伊藤 秋男 (南山大学教授)  
 大参 義一 (信州大学教授)  
 坪井 清足 (奈良国立文化財研究所長)  
 檜崎 彰一 (名古屋大学教授)  
 三浦 小春 (光陵女子短期大学教授)  
 花木 薫雄 (都市教育長会会長(一宮市教育長))  
 伊藤 芳 (町村教育長会会長(蟹江町教育長))  
 大橋 雄六 (県土木部長)  
 小島 俊夫 (県教育委員会社会教育部長)  
 林 正治 (清洲貝殻山貝塚資料館長  
 (清洲町長))
- 鈴木 睦美 (県陶磁資料館副館長)
- 監事**  
 本田 辰郎 (県出納事務局次長)  
 田中 隆三 (県教育委員会総務課長)

- 主 事 佐藤 公保  
 嘱 託 丹羽 博  
 ♪ 安藤 義弘  
 主 査 金原 宏  
 主 事 石黒 立人  
 主 査 竹内 尚武  
 主 事 小澤 一弘  
 ♪ 梅本 博志  
 嘱 託 松原 隆治  
 ♪ 長島 広  
 課長補佐兼主査 清水雷太郎  
 主 事 平野 清  
 ♪ 細野 正俊  
 ♪ 赤塚 次郎  
 主 査 梅村 清春  
 主 事 山田 耕治  
 ♪ 宮腰 健司  
 ♪ 池本 正明  
 主 査 上部 肇  
 主 事 浅井 和宏  
 ♪ 酒井 俊彦

専門委員

埋蔵文化財センターが行う発掘調査の専門的事項に関し、指導、助言等をいただくために、次の方がたを専門委員に委嘱しました。

- |       |       |                      |
|-------|-------|----------------------|
| 考古学   | 檜崎 彰一 | 名古屋大学教授              |
| 文献史学  | 早川 庄八 | ♪                    |
| 地理学   | 井関弘太郎 | ♪                    |
| 建築史学  | 浅野 清  | 愛知工業大学教授             |
| 動・植物学 | 渡辺 誠  | 名古屋大学助教授             |
| 形質人類学 | 池田 次郎 | 京都大学教授               |
| 保存科学  | 江本 義理 | 東京国立文化財研究所<br>保存科学部長 |

職員

事務局長(常務理事兼) 中林 茂

管理課

- |     |       |
|-----|-------|
| 課 長 | 斎藤 樹三 |
| 主 査 | 稲垣 隆一 |
| 主 事 | 伊藤 義幸 |
| ♪   | 森 信孔  |
| ♪   | 小倉 晴美 |

調査課

- |         |       |
|---------|-------|
| 課 長     | 橋本 雅司 |
| 課長補佐兼主査 | 遠藤 才文 |
| 主 事     | 鷺野 勉  |

## 愛知県教育委員会実施の調査事業

愛知県教育委員会文化財課

県教育委員会は、遺跡の周知徹底を図り、開発事業との円滑な調整をすすめていくために、その基本的な資料作成事業として、関連市町村の協力のもとに次に掲げる調査を継続的に実施していく。

### (1) 愛知県内古窯群詳細分布調査事業

#### 一 渥美半島地域 一

本事業は県内に所在する古窯跡の所在位置、現況等を把握し、分布図や台帳カード、報告書等の記録作成を行うもので、昭和52年度に開始して以来、すでに猿投山西南麓古窯跡群・尾北古窯跡群・三河地区古窯跡群・瀬戸古窯跡群について調査を完了してきた。

本年度は渥美半島地域（渥美郡田原町・赤羽根町・渥美町管内）所在古窯跡について分布調査を実施する。調査は名古屋大学文学部檜崎彰一教授（当センター理事）の指導のもと、同助手斎藤孝正氏を調査主任とし、文化財課職員・同研究室学生・地元研究者により現地踏査をすすめるもので、調査成果については「愛知県古窯跡群分布調査報告（V）」にまとめ、開発関連部局・研究機関等に配布し活用していただく予定である。

### (2) 遺跡地図作成事業

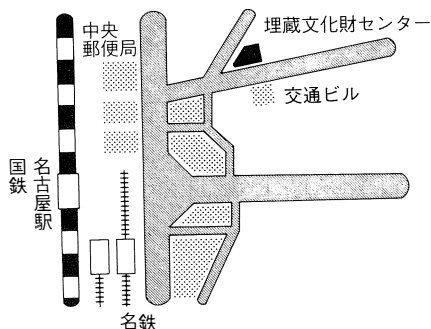
遺跡の周知徹底は埋蔵文化財保護の基本であり、詳細かつ確かな遺跡地図の作成は保護行政をすすめる上で必要不可欠なことがらである。本県では昭和47年度に「愛知県遺跡分布図」を刊行して以来、改訂版の作成を行ってはおらず、またその後に発見された遺跡数も多数にのぼっているため、昨年度より遺跡地図改訂作業を実施している。この計画は、尾張・西三河・東三河の3地区に区分して、それぞれ2ヶ年を要し3分冊の分布図を作成していくもので、本年度は尾張地区分布図の完成をめざす。

今回の遺跡地図では、現地踏査等に基づいて可能な限り遺跡範囲と所在地番とを明示するように努めるものとし、遺跡番号は市町村別の一連番号で表示していく。遺跡表示記号は文化庁発行の全国遺跡地図のものを踏襲し、加えて国・県・市町村指定史跡・名勝・天然記念物についても登載対象とする。また完全に滅失した遺跡についても、残存するものとは表示色を区別して記載する。

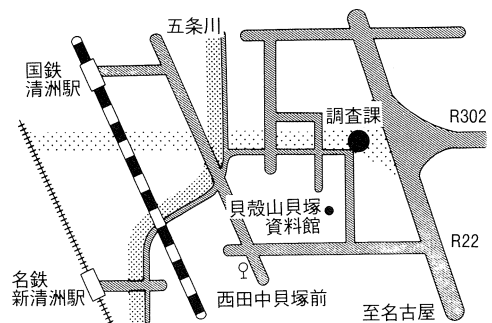
こうした遺跡の周知作業は県のみが行うことがらではなく、同様に市町村もすすめていくべき業務である。このため、各市町村におかれても、今回の趣旨を十分に理解されて管内遺跡地図作成に努められることを期待したい。

### 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター所在地

〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号  
名駅パークビル9F  
電話 052-586-3155



調査課 〒452 西春日井郡清洲町大字朝日  
字貝塚152  
電話 052-409-6021



## 遺跡としての清洲城下町

尾張平野の中央に位置する西春日井郡清洲町は、16世紀から17世紀初頭にかけて、尾張領主の支配の本拠地として光彩を放っていた。五条川によって形成された自然堤防とその旧河道とを巧に利用し築きあげられた城と城下町 — それが清洲城下町であったのである。三重の堀に囲まれ、東西約1.5km、南北約2.7kmに及んだこの城下町はその偉容を誇っていたのであった。しかしそれも東の間、慶長15年(1610)には名古屋築城に伴う「清洲越し」が開始され、3年の歳月をかけた一大移転によって町は解体しつくされたのである。その後は一宿場町と周囲に点在する農村へと変貌し、更には今日に至る長い歴史のなかでたび重なる開発の手を受け、往時をしのばせるものはほとんど失せてしまったのである。そして、当時の遺構面も潰滅的な状況にあるものとされていたのである。このため城下町は発掘調査の対象とされることもなく、破壊されるがままに放置されていたと言っても過言ではないであろう。

こうしたなかで、名古屋環状2号線の建設に伴う事前調査のうち、昭和57年に(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部が実施した朝日西遺跡の発掘調査は、当時の遺構面が良好に遺存していることを初めて確認し、これを契機に、埋蔵文化財としての清洲城下町の価値について再検討が求められることとなったのである。発掘調査は、環状2号線用地内に限定

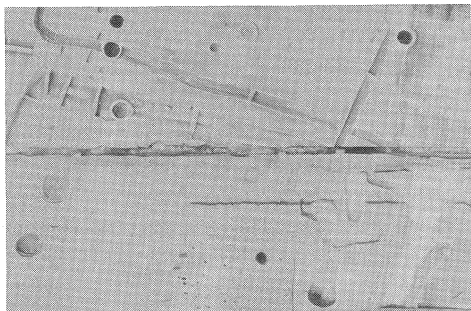


図1 清洲城下町遺跡・遺構検出状況

されているとはいえ、五条川を挟んで、朝日西遺跡、城下町遺跡と東西2地点で実施されていて、両者を合わせた調査面積は昭和59年度までに約15,000㎡、本年度の当センターによるものも含めれば約26,000㎡にのぼっている。

城下町遺跡では、幅16mほどの中堀遺構を含め、内堀と中堀との間の一角の調査が進められつつあり、一方朝日西遺跡は昨年度までに大半の調査が完了している。

朝日西遺跡は、城下町の東北の隅、中堀から外堀にかけての一角に位置し、その町割の一端を窺うことができる。当時の幹線道路の一つである小牧街道が南北方向に走り、それに沿って展開する町人地を中心に、その西側、中堀との間には武家地が、更には町人地と外堀の間には寺社地が広がっているのである。町人地の町割を見てみると、第一に、小牧街道に面して奥行き約20mほどの町家が展開していて、いわゆる両側町が形成されている。こうした町並は、小牧街道の東方約40mのところ、街道と併走する小路に沿っても認めることができ、先の町並とは背を接している。第二に、これらの町割は主要幹線に規制されているのか、南北方向の地割線が優越していて、南北方向に細長い形状を呈し、方格地割とはなっていない。また町家の背割線は直線的に通っていて、東西方向の短冊型の屋敷割となっている。こうした町並のあり方は、近世的な特徴をよくそなえているように思われるのである。第三に、二つの町並のうち遺構の残存状態が良好であった東側の町並について見てみると、個々の町家は間口5～9mほどとなっていて、道に面して建物が、その奥に井戸が穿たれるという、共通した配置をとっているようである。

武家地では、町人地とは違ってかわって広い単位での屋敷割がなされていて、間口が約30mという規模のものも見うけられる。A屋敷地

(図2)についてみてみると、推定で間口約30m、奥行き約50mの広さを持ち、屋敷地の南東

隅に井戸が造られていて、それに北接して南北3.3m×東西6.4m（2間×3間）の小規模な建物が、南西の奥には東西11.8m×南北5.2m（4間×2間）の東西棟と、その横屋として東西3.6m×南北9.3m（1間×3間）の南北棟がL字状に建っている。これらの建物はいずれも20～50cm大の円礫を礎石としていて、一部瓦葺きとなっていたようである。更に建物の北側に広く開けた空間——北接する屋敷地との境界近くには、製鉄炉が設けられていて、簡単な野鍛冶が行われていたことが想定されるのである。

寺社地では、建物址等については判然としていないが、幅7mほどの大規模な素掘りの溝によって屋敷割が行われていて、それによれば寺は東西二列に並んでいる。しかもこれらの大溝は外堀と有機的に結合し、全体として城下町の東北隅の防禦機能を昂めていたかの如き観を呈しているのである。

ところでこのような町割は、一体いつ頃成立したものなのであろうか。伴出遺物等によれば16世紀も第4四半紀以降の成立であり、16世紀代に限定すればそのあり方は大きく二段階に区分することができ、その後半期の姿といえるであろう。また城下町形成の歴史的な前提となる16

世紀以前の状況についても、注目すべき諸資料が検出されているのである。

周知の如く、清洲城下町については、歴代の尾張の領主たちが居城したとされているにもかかわらず、文献等の残存資料は乏しく、わずかに『清洲村古城図』（蓬左文庫所蔵）などによって堀のあり方などが知られるのみであった。即ち、城下町の成立・発展やその構造については、考古学的成果をまっとうして漸く研究の俎上へのせられることとなったのである。

このように2遺跡の調査成果は、単に城下町の構造解明の諸資料を提供したにとどまるものでは決してないのである。調査地点が城下の中心からはずれていて、既調査面積も、約400万㎡にのぼる城下町の町域に比せばなお及ぶべきもないとはいえである。清洲城下町といえ、ともすれば織田信長など戦国英傑たちの事跡と分ちがたく説明され、紹介される場合が多い。だが、少なくとも発掘調査の結果に基づけば、逆に彼らを清洲の地に引き込む誘因が、在地の歴史的動向のなかに深く根ざしていたと言わざるを得ないのである。その意味で、この2遺跡は、貴重な資料を私たちに提供しているといえるであろう。（遠藤才文）

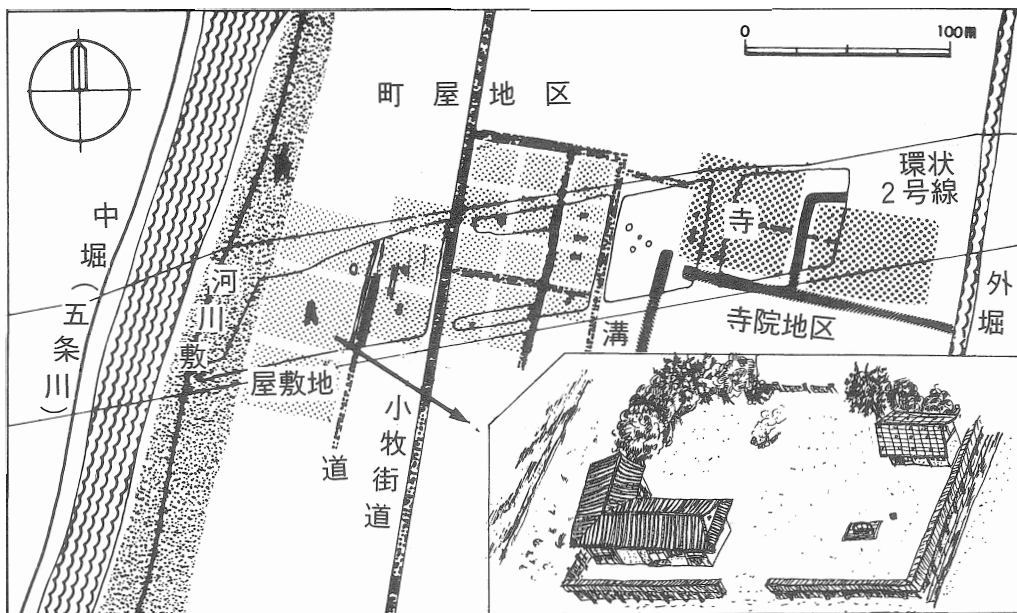


図2 朝日西遺跡町割模式図

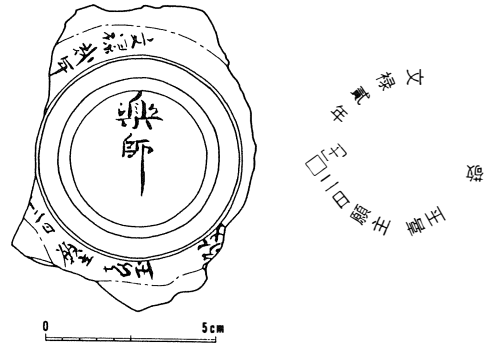
資料紹介

朝日西遺跡出土  
「楽師」黄瀬戸椀

朝日西遺跡は、五条川の東岸、東西幅 300m 程の自然堤防上に所在する。この遺跡では古代末～近世に至る 900年間の人々の生活の跡が、良好な遺存状態で検出されている。特に、清洲城下町に関しては、注目すべき事実が明らかになりつつある。

右図の出土遺物は、清洲城下町の外堀に近い溝状遺構から出土した黄瀬戸椀の底部片である。外面に、「文禄貳年 月 十一日 願主 喜玉 敬」の文言が、底部中央には、「楽師」の2文字が、いずれも墨痕あざやかに書かれている。

文禄2年(1593)は、折りしも豊臣秀吉が兵農分離政策の一環として清洲全域の戸数調査を実施した年である。文言については、出土地点が寺町と推定される地区であることやその内容から供養に関するものと考えられる。また、「楽



紀念銘入の黄瀬戸椀 (1/2)

師」については、当時の武将たちに愛好された幸若舞や能楽に関係するものであり、付近には芸能民が多く居住していた地区があったと伝承されている。

今回の資料は、今まで伝承や推定の域を脱しえなかった清洲城下町のあり方を明らかにしていく上で、その持つ意味は多岐にわたって重大である。

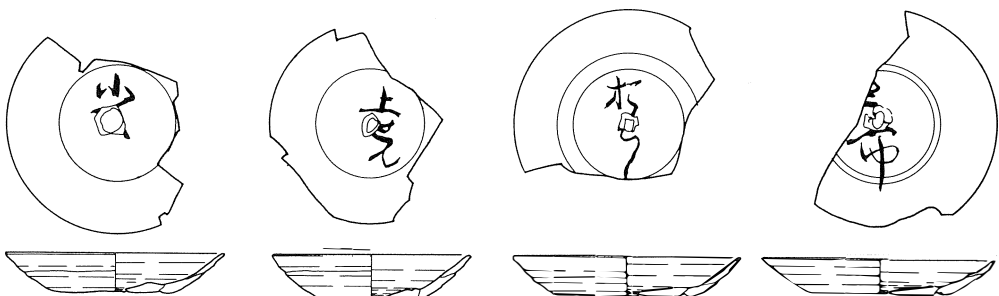
(金原 宏)

清洲城下町遺跡出土  
穿孔墨書土師皿

今回取り上げた穿孔墨書土師皿は、愛知県教育サービスセンター・埋蔵文化財調査部の昭和59年度の発掘調査に伴い、16世紀前葉の溝。59D区SD05より出土したものである。この溝は、幅約5m、深さ約80cmで、やや東に振れ南北方向に走るもので、西岸においては木と竹を格子に組んだ柵状の遺構が検出されている。

墨書された土師皿は7枚あり、全て口径10～12cm、器高2～2.5cmの同タイプのもので、粘土紐積み上げ後ロクロ成形されている。底面に墨書された後外より穿孔されているのが特徴的であり、同溝より、同種の皿の側面に小穴を穿ったものも一例出土している。墨書の精緻な判読については、今後の研究が待たれるが、ひとつ「小人」と読めるものについては、「人」と書かれた後、異筆によって「小」が書き加えられたものと思われ、この穿孔墨書土師皿の性格を考える上で注目されるものであろう。

(宮腰健司)



清洲城下町遺跡出土の穿孔墨書土師皿 (1/4)

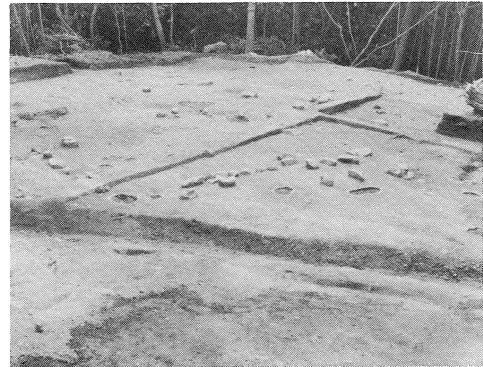
## 調査速報

## 岩崎城

日進町教育委員会

岩崎城は、愛知郡日進町大字岩崎字市場に所在する室町時代末の平山城である。織田信秀により享禄年間（1528～1531）に築城されその後徳川（松平）方に奪われたのち、丹羽氏が天文7年（1538）から慶長5年（1600）関ヶ原の戦いの戦功により三河伊保（豊田市猿投町大字上伊保）に一万石の小名として転封されるまでの4代62年間居城とした。天正12年（1584）小牧長久手の戦いの際に落城している。

調査は、岩崎城跡発掘調査団により行われ、多数の遺構・遺物が検出された。遺構は、礎石建物（写真）・鍛冶工房址・厨房・井戸・掘立柱建物群等が検出された。礎石建物は、7 m 80 cm × 7 m 80 cm（5間 × 3間）で北側に庇がついている。庇の下には、製鉄炉、ごみ捨て場がある。南と東に直角の柵列をもつ。鍛冶工房址は、5 m 40 cm × 4 m 40 cmの貼り床をした住居址内に製鉄炉と石組の排水溝を持ったものである。厨房は、約5 m四方の落ち込みの隅に炉と石組の



かまどを持ったものであり、東側に径2 m 50 cmの素掘りの井戸との関係が考えられる。掘立柱建物群が発掘区の西部から、中央部の礫群をはさみコの字形で検出された。この内で、製鉄炉が10ヶ所も確認されており興味深い。遺物は、北宋銭・鉄製品（鏝・釘・鎌・鉄砲玉）・石製品（硯・砥石）・陶磁器・土師器等が多数出土している。中でも、中国福建産の青磁梅花皿・景德鎮産の外底に「大明年造」と書かれた染付の椀・瀬戸美濃産の大窯初期頃の灰釉丸椀・灰釉印花皿・灯明皿・すり鉢等が出土している。

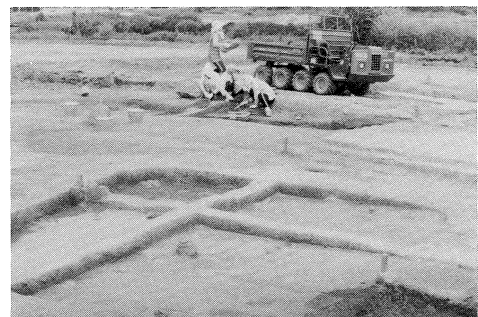
（本文は、調査主任、前川要氏（名大）の資料を基に日進町教委社会教育課が作成した。）

## 天神遺跡

知立市教育委員会

昭和59年度から始まった知立西部は場整備事業によって、西中遺跡群（西中貝塚他6遺跡）のうち、荒新切・中長・祐古山・天神の各遺跡が影響を受けることになった。知立市教育委員会では、昨年度範囲確認調査をし、荒新切遺跡、中長遺跡、天神遺跡で遺構を確認した。昭和60年度から、3年計画で、本調査を行うことにし本年度は、天神遺跡の600㎡の発掘調査を実施している。

6月3日現在、約250㎡の発掘調査が、ほぼ完了したが、遺跡の範囲は当初の予想を上まわりそうである。現在までに、竪穴住居跡2、掘立柱建物跡1と4本の溝、多数のピットや土拡が発見された。遺物は、土師器の器台と山皿が



竪穴住居発掘調査風景

ほぼ完形で発見されたのをはじめ、土師器の破片多数と少量の弥生式土器、須恵器等の破片が出土している。

発掘調査は9月ごろまで続く予定である。

来年度は荒新切遺跡の約3分の2、昭和62年度には、その残りの中長遺跡で発掘を行う予定である。

愛知県埋蔵文化財担当専門職員名簿 (昭和60年 5月 1日現在)

県市町村名	所 属	職 名	氏 名	尾西市	歴史民俗資料館	学芸員	伊藤 和彦
半田市				市立博物館	館長	立松 宏	
東海市				平洲記念館	主査	立松 彰	
知多市				民俗資料館	館長	杉崎 章	
常滑市				歴史民俗資料館	学芸員	中野 晴久	
大府市				歴史民俗資料館	社会教育指導員	加藤 岩蔵	
清洲町				貝殻山貝塚資料館	技師	高橋 信明	
武豊町				歴史民俗資料館	館長	磯部 幸男	
〃				〃	学芸員補	奥川 弘成	
岡崎市				教育委員会社会教育課	主 事	荒井 信貴	
〃				〃 市史編纂事務局	嘱 託	都築みどり	
〃				〃	〃	木村 里美	
豊田市				教育委員会社会教育室	係 長	田端 勉	
〃				〃	主 査	伊藤 達也	
〃				郷土資料館	主 査	松井 孝宗	
知立市				教育委員会社会教育課	埋蔵文化財調査員	岡本 茂史	
豊橋市				美術博物館	主 事 補	朝倉 美典	
〃				〃	嘱 託 員	賛 元洋	
〃				〃	嘱 託 員	小畑 頼孝	
蒲郡市				郷土資料館	主 事	小笠原久和	
豊川市				教育委員会社会教育課	主 事	片山 洋	
新城市				教育委員会社会教育課	主 事	夏目 勝雄	
三好町				歴史民俗資料館	主 査	安田 幸市	
一宮町				教育委員会	主 事 補	須川 勝以	
設楽町				奥三河郷土館	館 長	鈴木富美夫	
足助町				資料館	館 長	鈴木 茂夫	
〃				緑の村協会	職 員	鈴木 昭彦	
愛知県	教育委員会文化財課	教育主事	加藤 安信				
〃	〃	〃	中川 真文				
〃	〃	主 事	赤羽 一郎				
〃	陶磁資料館	学芸課長	柴垣 勇夫				
〃	〃	学芸員	浅田 員由				
〃	〃	〃	井上喜久男				
〃	〃	〃	仲野 泰裕				
〃	〃	〃	野末 浩之				
名古屋市	教育委員会文化課	学芸員	水谷栄太郎				
〃	〃	〃	小島 一夫				
〃	見晴台考古資料館	学芸員	山田 敏一				
〃	〃	〃	野口 泰子				
〃	〃	〃	平出 紀男				
〃	〃	〃	大村 有作				
〃	〃	〃	野澤 則幸				
〃	〃	〃	水野 裕之				
〃	〃	〃	伊藤 正人				
〃	〃	〃	伊藤 厚史				
一宮市	博物館建設準備事務局	事務局長	岩野 見司				
〃	教育委員会社会教育課	主 事	土本 典生				
瀬戸市	歴史民俗資料館	主 事	藤澤 良裕				
小牧市	教育委員会社会教育課	主 事	中嶋 隆				
稲沢市	教育委員会社会教育課	主 事	北條 献示				
〃	〃	調査員	日野 幸治				

センターニュース

調査録

阿弥陀寺遺跡 A区中世屋敷地検出 (14世紀)。  
清洲城下町遺跡 B区堀跡検出「天正14年」銘瓦片出土。土田遺跡 A区前方後方形周溝墓確認。  
整理作業 59年度発掘調査阿弥陀寺遺跡より多量の炭化米発見 (フローテーション)

来訪者 (4~6月)

5月28日 光谷拓実 (奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター), 6月5日 木下 實他7名 (京都大学霊長類研究所), 6月15日 吉岡康暢 (国立歴史民俗博物館)

人事異動

9月17日 服部哲也・竹内宇哲退職 (名古屋市教育委員会学芸員として就職)

日誌

4月1日 財団法人愛知県埋蔵文化財センター発足  
4月16日 各調査区発掘調査開始  
5月7日 整理業務開始  
6月14日 第1回理事会  
6月14・15日 東海三県埋蔵文化財担当者会議 3名出席  
6月17日 石堂野遺跡 (御津町) 調査開始

埋蔵文化財愛知 No 1

発行 昭和60年 9月  
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター  
〒450 名古屋市中村区名駅二丁目  
44番5号 名駅パークビル9F  
TEL 052-586-3155  
印刷 東海プリント社